

紙つづて

学生とは既に四カ月以上も直接、会っていない。学内への立ち入りは原則禁止だから、学生同士も顔を合わせていない。

今年上半期の世界の状況を誰が想像しただろう。リモートでイタリアの知人、友人と近況を尋ね合い、励まし合った。イタリアの新聞やニュースを学生と共有して時局の理解に努めた。

この事態が総括できるのは、おそらく十年、十五年と歳月が過ぎてからのことだろう。だから、その時、自分はこんなことを感じ考え、過ごしたと言えるように今を生きてほしいと学生には伝えた。

イタリアでは義務教育から口頭試

好 武田

物語る

験が普通である。暗記では不十分とされ、論理的に述べる術にたけている。だからデータの列挙ではなく、データの裏付けとともに自分の切り口で語る力が必須だと学生に告げた。対面であろうとなかろうと。人工知能(AI)に負けて勝つのだと。学生たちは直観的に自覚している。画面に映る上半身。そこから逃れるわけにはいかないから、自分の言葉で大いに語ってくれる。

地球規模で生じた当たり前のリモート風景は、今ある文化をごく自然に、ドラスチックに変えていくように思う。互いに体温を感じる距離ではなくなった。感動の共有はどこまで可能なのだろうか。

この半年間、お読みくださりありがとうございました。感謝を込めて。
Grazie. (静岡文化芸術大教授)

2020.6.27

2020.6.27

中日新聞(夕刊) P.1